

東京・斑鳩リレーセミナー 開催記録
聖徳太子1400年御遠忌 ～法隆寺との関わり～
第1回 東京会場

● 開催日時・場所

- ・令和元年11月10日（日曜日）
午後1時～午後3時（開場：午後12時30分）
- ・日比谷図書文化館地下1階 日比谷コンベンションホール（大ホール）
（東京都千代田区日比谷公園1-4）

● 講師

第1部「聖徳太子と法隆寺」

法隆寺 執事長 古谷正覚 師

第2部「斑鳩の里で、日本文化の源流に出会う旅の勧め」

（株）小学館 サライ編集長 三浦一夫 氏

斑鳩町 教育長 山本雅章 氏

斑鳩町観光キャンペーン大使 池上真生 氏

● 司会進行

斑鳩町観光キャンペーン大使 池上真生 氏

● 当日のようす



時間	関係者	台 詞
13 : 00		～開場～
13 : 00	池上	<p>皆さまこんにちは。</p> <p>只今から、東京・斑鳩リレーセミナー「聖徳太子1400年御遠忌～法隆寺との関わり～」を始めさせていただきます。</p> <p>本日、司会進行を務めさせていただきます、斑鳩町観光キャンペーン大使 池上真生と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>それでは、主催者を代表いたしまして、「世界文化遺産」地域連携会議・斑鳩プロジェクトチームの委員であり、斑鳩町町長の中西和夫からご挨拶申し上げます。</p> <p>中西町長、よろしくお願いいたします。</p>
13 : 01	町長	<p>皆さま、こんにちは。</p> <p>本日はお忙しいなか、東京・斑鳩リレーセミナーにこのように大勢の方にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。この東京・斑鳩リレーセミナーですが、開催にあたりましてははじめに斑鳩町の概要についてお話させていただきます。</p> <p>斑鳩町は昭和22年に1町2村が合併致しました。その合併の対象は、法隆寺村、富郷村、龍田町です。斑鳩町の町名の由来でございますが、古来この斑鳩の里に群生しておりました鳥がイカルという名前であったことと、そして推古9年に聖徳太子が造営されました法隆寺の東院の場所に斑鳩宮があったということから、斑鳩町と命名されたと聞いております。</p> <p>法隆寺村には法隆寺が、富郷村には法輪寺と法起寺が、龍田町には万葉集で有名な紅葉がきれいな竜田川があり、斑鳩の里はこうした歴史がたくさんある町でございます。</p> <p>また、今この時期には法隆寺や法起寺周辺で、地域の農家の方々がコスモスを栽培してくださっており、周辺一帯がコスモス畑になり、その景色とともに法隆寺さんや法輪寺さんを撮影できるような、素晴らしい田園風景の町でございます。ぜひ機会があれば、斑鳩町に寄っていただければと思います。</p> <p>また2021年には聖徳太子1400年の御遠忌がございます。これを契機に皆さまに法隆寺に来ていただいて、斑鳩町を知っていただきたいと思っております。</p>

<p>13:05</p> <p>池上</p>	<p>以前より法隆寺といたしますと、観光客は多いものの、お寺だけを見て帰られるという日帰り観光が多い町でございましたが、そういった方にぜひ斑鳩町に足を留めていただいて、斑鳩町のまちあるき観光をしていただくということで、今年9月に一軒ホテルが開業しております。また1400年御遠忌を迎える前、来年12月にはもう一軒ホテルが建つ予定であります。ぜひ斑鳩へ足を運んでいただき、皆さまにはゆっくりと斑鳩の里を見ていただければと思います。</p> <p>令和2年2月22日にも斑鳩町でセミナーを開催いたします。そのセミナーに合わせましてぜひ斑鳩町を訪れていただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。</p> <p>またこのあと法隆寺の執事長であります古谷様から、「聖徳太子と法隆寺」という題目でご講演をいただきます。そしてそのあと第二部と致しまして、「斑鳩の里で、日本文化の源流に出会う旅の勧め」と題しまして、サライ編集長の三浦様、斑鳩町から教育長の山本、キャンペーン大使の池上、この3名で斑鳩の魅力をお話させていただきますので、どうか皆さま、斑鳩の里というのを聞いて、ご理解いただいて、そしてまた足を運んでいただければと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。本日はどうもありがとうございます。</p> <p>中西町長、ありがとうございました。</p> <p>ここで私から、世界文化遺産・法隆寺のある町・斑鳩についてご紹介させていただきます。</p> <p>斑鳩町は、奈良県の北西部に位置する、古来からの交通の要所です。飛鳥時代、聖徳太子が寺を建てるのにふさわしい土地を探しておられたとき、龍田明神が白髪の老人の姿となって、「ここより東に斑鳩の里がある。そこに寺を建てなさい」というお告げがあり、聖徳太子は斑鳩の里に法隆寺を建立されたと伝えられています。</p> <p>また、聖徳太子は、斑鳩の里に「斑鳩宮」「中宮」「岡本宮」「葦垣宮（あしがきのみや）」の4つの宮を造営し、一族で暮らしておられました。今なお、斑鳩には、聖徳太子ゆかりの寺社や遺跡と、つみかさなる歴史が多く残されています。</p> <p>そして、西暦607年に法隆寺が建立されてから1400年、平成5年12月には、「法隆寺地域の仏教建造物」が、日本ではじめて、姫路城とともに、世界文化遺産に登録されました。</p> <p>このセミナーは、2021年の聖徳太子1400年御遠忌に向けて、文化庁の支援を受けて、東京・地元斑鳩でのリレ</p>
------------------------	--

13:08	執事長	<p>一講座を開催するものです。</p> <p>法隆寺とその周辺の寺社や歴史、そして斑鳩の魅力を、本日の講師により、じっくりとお伝えさせていただき、来年2月の斑鳩セミナーにぜひ皆さまにお越しいただければと考えています。</p> <p>また、本日お配りの資料の中にアンケート用紙を同封させていただいております。今後の参考とさせていただきたいと思っておりますので、ご協力よろしくお願いいたします。</p> <p>第1回目となる今回は、第1部に法隆寺執事長 古谷正覚様より「聖徳太子と法隆寺」のテーマでご講話いただきます。休憩時間をはさみまして、第2部「斑鳩の里で、日本文化の源流に出会う旅の勧め」のテーマで、(株)小学館 サライ編集長 三浦一夫様、斑鳩町 教育長 山本雅章氏、そして私斑鳩町観光キャンペーン大使 池上によるトーク鼎談(ていだん)を行います。</p> <p>それでは、第1部といたしまして、法隆寺執事長 古谷正覚様よりご講話いただきます。古谷執事長、どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>皆さんこんにちは。法隆寺の古谷正覚と申します。</p> <p>本日、東京・斑鳩リレーセミナーということで、大勢の皆さまにご参加いただきましてありがとうございます。</p> <p>先ほどお話がございましたように、2021年、聖徳太子の1400年の御忌(ぎょき)法要を迎える年になっております。ちょうど聖徳太子がお亡くなりになられて1400年でございます。一般的に聖徳太子のご命日法要を聖霊会(しょうりょうえ)、聖霊会式(しょうりょうえしき)と呼んでおります。会式というのは法会儀式(ほうえぎしき)のことでございます。古くからご命日法要を会式と呼んでおりました、法隆寺だけでなく、日蓮宗なら日蓮さんの会式ですとか、各宗派で使われます。特に10年目、50年目、100年目にあたる節目の年には御遠忌(ごおんき)とか、御聖忌(ごしょうき)、御忌(ぎょき)と法隆寺では呼んでおります。聖徳太子は推古30年、622年の2月22日にお亡くなりになりましたので、法隆寺では毎年2月22日、この日を聖徳太子のご命日法要として会式と呼び、法要を行っております。</p> <p>法隆寺ではこの会式を二つに分けて、大会式、小会式と呼んでおりました、毎年行っている会式を小会式、10年、5</p>
-------	-----	--

0年、100年という単位で行うのを大会式と呼んでおります。

現在、この小会式を3月22日から24日まで聖霊院で法隆寺会式として行っております。元々、聖徳太子がお亡くなりになった2月22日にしなければならないのですが、明治6年に暦が旧暦から新暦に変わり、それ以来毎年2月22日を暦で繰って行っておりましたが非常にややこしいので、明治35年より1か月遅らせて、ちょうど彼岸の時期でもある3月22日に会式を行い、現在はこの日に聖徳太子会式を行っております。聖徳太子に関わる他のお寺はまた別で、4月22日に行っておられたり、4月11日や、新暦でも2月22日に行っておられるなど、会式はそれぞれに聖徳太子にゆかりのあるお寺で行われております。

さて、この聖霊院で会式が行われるようになったのは、平安時代でございます。保安2年、1121年に聖霊院が建てられまして、そこへ聖徳太子像を安置することになりました。1121年は聖徳太子がお亡くなりになられて500年目の節目の年で、それを意識して聖霊院が建てられたということでございます。

その後しばらく行われていたのかどうかわかりませんが、聖霊会という記録は弘安7年、1284年、鎌倉時代後期に聖霊院が再建されたという記録がございまして、その時期に会式がまた行われるようになりました。

小会式は聖霊院で、大会式は夢殿（ゆめどの）で行われておりました。この頃の大会式は10年ごとにやっていたのではなく、毎年やっていたりしばらくしなかったりしておりました。

聖霊会という法要の始まりは天平時代、天平20年、748年に行信僧都（ぎょうしんそうず）によって初めて夢殿で行われています。鎌倉時代の『別当記』という書物には「天平20年2月22日、行信大僧都、聖霊会これを始める」と書かれております。聖徳太子がお亡くなりになられて、約120年のちになるんでしょうか、夢殿が建てられまして、この夢殿の落慶法要と聖徳太子のご命日法要を合わせて聖霊会を始められました。

それと記録にはあまり記載がありませんが、貞観元年、859年に道詮律師（どうせんりっし）という方が再び聖霊会を行われたといわれております。ちょうどこの時期、道詮律師が夢殿の修理をなさって、その修理が完成されたことを記念して聖霊会が行われました。

鎌倉時代に入りますと、色々な方にご寄進をいただきまして、源頼朝は幡や面、舞樂法要をする太鼓や衣裳、法要をす

る舞台などを寄進されておりました、聖霊会という行事が次第に盛んになってきます。

元禄4年に1070年遠忌聖霊会ということで、元禄時代から初めて、何年という御遠忌が行われるようになりました。この年より、夢殿で行ってありました聖霊会を、西院伽藍の大講堂の前に舞台を組んで、舞楽法要を行っております。基本的には夢殿から八部衆によって、夢殿の太子様を大講堂に移して法要を行っております。その間の行列は大変古式豊かな行列ですので、ぜひご覧いただければと思います。

本日は聖徳太子と法隆寺というお話でございますので、御遠忌に関わってきますけれども、まず聖徳太子というのはどのようなお方であったかということを知っていただきたいと思っております。学校の授業では十七条憲法を作られたとか、冠位十二階を出されたとか、遣唐使を送られたとか色々ございますが、そういう話ではなく、聖徳太子にまつわる伝説をまとめた『聖徳太子伝暦』に書かれているお話を本日はさせていただきます。『聖徳太子伝暦』は平安時代に書かれたものですから、聖徳太子を非常に誇張して超人的なお方であると示すような文章になっております。

一番最初に書かれているのは、聖徳太子の父君は橘豊日皇子（たちばなのとよひこのみこ）、欽明天皇の第四皇子、用明天皇であるということでございます。「穴穂部間人皇女（あなほべのはしひとのひめみこ）を妃となす」と、聖徳太子のお父さんお母さんのことを記されております。

その次に、欽明天皇32年正月一日、甲子の夜、母妃、夢みらく、金色の僧、容儀甚だうるわし、妃に向かいて謂いて曰く「われ、救世の願あり。しばらく妃の腹に宿らん。」妃問うて曰く「これ誰なるや。」「われ、救世菩薩。家、西方にあり。」と記されております。妃が承諾されると金色の僧は口より中に入った。母妃は驚いて夢より醒めて、父君にこのことを語られた。これを聞いた父君の皇子は、生まれる子どもは必ず聖人であると喜ばれたということです。まさに夢のお告げののちに妃は懐妊されたわけでございます。

それから、母君は心中ことのほか爽快で、八ヶ月を過ぎてから腹中から物言う声が聞こえ、父君ならびに母君大いに奇なることとされた、と書かれており、つまり超人的なことであるということでございます。

お釈迦様の説話にもこれに似た話がございまして、お釈迦様のお母様のマヤ夫人が、六つの牙の白い象の夢を見て懐妊されたというお話がございまして、それによく似たストーリーが用いられている。まさに聖徳太子は日本のお釈迦様とい

うことを意識して伝暦という物語が始まります。

次に誕生ですけれども、敏達天皇元年正月1日、妃宮中を巡って厩戸の前に到達されたとき、覚えず産せられた。お付の人たちは驚いて、母君を抱き寝殿に運び入れ、母君につつがなく安らかに眠るようにされた。父君は大いに驚き、侍者たちを集めて相談されようとしたとき、たちまち赤黄の光が西方より至りて殿内を照らし、しばらくのちに止んだという奇跡が書かれております。これは聖徳太子が誕生されたときの光景を述べておられます。聖徳太子は『古事記』や『日本書紀』では厩戸皇子、厩戸豊聡耳皇子（とよとみみのみこ）という名前が付けられております。そういう名前にちなんで、この物語が書かれたのではないかと思います。厩戸皇子というのは厩戸の前で生まれたというところから付けられたと言われております。

次に2歳の2月15日には、合掌し東を向いて「南無仏」と唱えたと。人の教えによらず乳母が禁じたが、太子は涙を流され、制することよらず七歳ののちまで続けられたと太子伝暦には書かれております。この2月15日というのはインドではお釈迦様がお亡くなりになった涅槃の日でございます。2月15日はお釈迦様が入滅された日、二歳の聖徳太子は東を向いて南無仏と、お釈迦様、仏様に帰依しますよ、と唱えられ拜まれたわけでございます。

ですからこういう貴重なお姿を後世に伝えるために聖徳太子の二歳像、南無仏太子像というものがのちに造られるようになりました。この像の元になったストーリーが2歳の出来事でございます。

また古くからの言い伝えで、この伝暦には書かれていないんですが、この合掌されたときに舍利が手から落ちたという伝説がございます。舍利というのはお釈迦様の骨ですね。この舍利は、夢殿の北側にある舍利殿という所で伝承の舍利が安置されてございます。こういう舍利も法隆寺の御遠忌のときには、夢殿から大講堂へ舍利神輿を以て運ぶというしきたりになっております。

そして三歳の出来事でございます。敏達天皇3年、574年に春3月、桃花宴の早朝、父君皇子は母妃と太子を率いて、後苑にあそばれたり。父君皇子は太子に向かって、「桃花を楽しむや、松葉を楽しむや」と聖徳太子に聞かれます。聖徳太子は桃の花か松の葉っぱかという質問に対して、松の葉を選ばれる。さらに父君皇子はそのゆえんを尋ねるわけですが、

聖徳太子は桃花は一旦の詠物、しかし松葉は万年の壽木なりと答えられたということです。桃の花は一時的にきれいだなと言って咲いて散っていくが、松の葉は永遠のものであると答えられたということで、これを非常に褒め称えられたということです。

桃の節句の朝の太子ご一家の有り様を語られたわけですが、三歳の太子が永遠に変わらないという仏教の教えを示された、そういう優れた能力があるという物語でございます。

法隆寺には松の木が多いのですが、こういった話から松を植えております。最近松くい虫によって枯れて無くなったり少なくなったりしておりますが、昔は松で飾られておりました。

そして7歳、敏達天皇7年、578年には百濟から献上された経本数百巻を春から冬にかけてことごとく読破されたということです。そして天皇に付き「8、14、15、23、29、30日、これ六斎と為す。この日梵天帝釈降りて国政を見る、ゆえに殺生を禁ずる、これ仁の基なり」ということを奏上されたと書かれております。

今はあまり六斎の暦は利用されておりませんが、在家の人たちが心を清浄に保ち、戒律を守り、善いことをおこなう精進の日ということで六斎の日がございます。これはまさに梵天帝釈がこの世に来られて国政を見て、殺生を禁じるという思いやりに基づくものでございます。

この7歳のときにお経を百巻読まれたというお姿に基づいて、七歳像が造られております。この七歳像は聖徳太子の御遠忌のときには、夢殿から大講堂へ、太子神輿によって運ばれる法隆寺にとっては非常に大切な仏様でございます。この仏様が年代のわかる太子像としては一番古いものでございます。

次に12歳の出来事ですが、日羅というお方が敏達天皇のときに朝鮮半島との外交問題を諮問するために招聘されました。日羅は難波の館に逗留していましたが、当時12歳の太子はこの日羅を見たいと天皇に申し出られたら、天皇はこれを許されなかった。

そこで太子はひそかに馬飼いの子に扮して顔を汚して縄帯を締め、難波の館に出かけられた。そのほかの子どもたちと混じって、物陰から日羅を見られていた。そのときに日羅が素早く太子を見つけて、この童子は只人ではないと知り、太子の前にひざまずいて礼拝された。そして「敬礼救世観世音、

伝燈東方粟散王」と唱えられたと書かれております。

この不思議な日羅の全身は光り輝き、また太子の眉間からも光を放ちて、その僧はあたかも太陽の光線のようにであったと記されています。粟散王という言葉ですが、仏教の一つの世界観、須弥山をとりまく大海の上にある粟の粒のように散らばっている小さな国の王様であるということになります。

「あなたは救世観世音菩薩として礼拝されています、仏法の東方、日本に伝えた、仏法の王となるお方でありましょう」という意味でございまして、平安時代以降、このように聖徳太子は救世観音の化身であると語られ、これ以降、聖徳太子の信仰が非常に盛んになってくるわけでございます。

そして14歳の時、この頃は蘇我氏と物部氏の争いがそろそろ起こってくるわけですが、「蘇我馬子、豊浦の大野の丘の北に塔を建て、要の柱を立てるとき、太子、合掌三拝された」と記されています。

これに対して物部氏の排仏者というものは大野丘の北の仏塔を切り倒し、馬子の建てた石川の仏殿を焼き、また仏像を難波の堀江に投じた、ということが書かれておまして、蘇我氏と物部氏、崇仏と排仏という争いが起こってきます。

ちょっと余談でございますけれども、この馬子の石川の仏殿が焼き打ちにあって、仏像が大阪の難波の堀江に捨てられたということですが、こののちに、信濃国の伊那郡に麻績（おみ）という郷がございまして、そこに本田善光という人物がおられました。その国司郡司にお仕えして都に上り、あるとき難波の堀江にさしかかると、水の底から光り輝いているものを見つけられた。それが御仏様であったとして、この本田善光が信州へ持ち帰って造ったお寺が善光寺ということで、非常に聖徳太子と善光寺は関わりがあり、『善光寺縁起』には聖徳太子と善光寺如来が手紙をやり取りしたとか、手紙を3回出したら3回返事があったとか、そういう善光寺如来と聖徳太子の話があります。

そして16歳の時には、用明天皇二年4月、用明天皇が病気の床につかれまして、その時に太子は一晩中着物の衣帯を解かずに看病されたと。そのときに袈裟を着けて香炉をにぎって祈願されたということです。看病して孝養に尽くされた様子が書かれております。

天皇も仏教に帰依して病氣平癒を祈られたと書かれており、この話が元となって、16歳像、『聖徳太子孝養像』が造られました。聖徳太子が珍しく袈裟をつけて、香炉を持って、病氣平癒を祈願しておられるという仏様の像です。

16歳の秋、7月ですけれども、蘇我馬子と物部氏が崇仏と排仏の争いをしているなか天皇がご病気になられたので、皇位継承の内紛ということで、戦いの頂点に立ってくるわけでございます。

物部軍は強盛にあつて太子軍は三度ほど敗退されておりますが、そこで聖徳太子は仏の加護以外にないと、勝利を願われまして、秦河勝（はたのかわかつ）という家来に命ぜられて、白膠木（ぬるで）の木で四天王像を作られて、この四天王像に勝利を祈願されました。また太子はこの四天王像を頂髪（ちょうはつ）、つまり頭の上にあだかれて、戦いに勝たせていただけたら必ず四天王のために寺を造ると誓われたということです。大阪の四天王寺というお寺はこの勝利を誓われたことによってお建てになりました。

またこのときの馬に乗って物部軍と戦っておられる姿として、馬上の太子像が作られました。

また、『善光寺縁起』には「われ、この合戦を起こすは国位を争うためにあらず。ただ仏法を興隆し、衆生を利益せんがためなり」ということで、国威を争うためではなくて仏法を広めるため、そして衆生に利益があるがために戦っておるのだと書かれております。

そして22歳、593年、女帝推古天皇が即位されるとともに摂政に就かれます。

その翌年には、推古天皇が『三宝興隆の詔』（さんぼうこうりゅうのみことり）を発せられます。三つの宝、すなわち仏と法と僧が興隆するように、広く伝わるようにということでございます。仏というのはお釈迦様のこと、法というのはお釈迦様の教え、僧というのはお釈迦様の教えを守って修行するお坊さんたちのグループと、この仏法僧の三つが揃うことで、仏教の教えが世の中に広まるということです。

この三宝興隆の詔を発せられた続きでございますが、これは『聖徳太子伝暦』にも『日本書紀』にもこの言葉は書かれておりますが「そのとき諸々の臣（おみ）や連（むらじ）は、君と親の恵みのために競って仏舎を造った、これを寺と名付けた」とありまして、古い時代のお寺というものは、天皇や各々の家の親の恩に報いるために建てられたということが述べられているのでございます。

また、これによって仏法が盛んになって広まっていきます。このときに聖徳太子も四天王寺、法隆寺、中宮寺などのお寺をお建てになって仏教を広めたいと思われたということです。

そして24歳のころ、聖徳太子の伝説では8人の話を同時に聞いて、一人ひとりに正しい答えをされたという話書かれています。豊かで聡明な耳ということで、聖徳太子の別名でございます豊聡耳皇子（とよとみのみこ）という名前が出てくるわけでございます。『日本書紀』では10人になっておりますけれども、『伝暦』では8人になっております。

そして30歳のとき、ちょうど601年になる頃でございますけれども、聖徳太子が斑鳩宮を造営される。その4年後の34歳の頃にこの斑鳩宮に移られます。

その前年、604年になるわけでございますけれども、33歳のときには十七条憲法を定められ、冠位十二階に続いて十七条の憲法が作られたわけでございます。

35歳のとき、推古天皇14年、606年でございますけれども、聖徳太子が天皇の勅で所説諸経を演ぜよと。勝鬘経（しょうまんぎょう）の講説をせよと命じられたのですが、聖徳太子は未熟なるが故にしばらく猶予をと天皇に要望をされたのでしばらくされなかった。でも天皇の要望に応じて勝鬘経を講ずることになり、このとき太子は僧のような容儀で、講讚（こうさん）は三日を以て終わったということです。これは勝鬘経講讚といわれ、一番最初に太子が天皇にお経のご説明をされたということです。

それに引き続いて、今度は法華経を岡本宮で講ずと。講讚は七日間、天皇は大いに悦ばれ、播磨の国の水田360町を聖徳太子に施されたという記述がございます。この播磨の国の水田というのがこのあと法隆寺を支える基盤となるわけで、播磨の国の水田からあがってくる法隆寺の運営資金を、聖徳太子は法隆寺に委ねられたということです。

この35歳に勝鬘経の講讚したというのはお釈迦様との関わりを意識して作られたのではないかなと思います。お釈迦様も35歳で悟りを開かれ、鹿野苑（ろくやおん）というところで初めてお説教をなさったということで、聖徳太子とお釈迦様を結び付けているのではないかなと。

聖徳太子がお経を説かれたときの姿、講讚像というのも造られております。また、聖徳太子が摂政になられたときの摂政像という太子像もございます。

そして聖徳太子は41歳のときに維摩経（ゆいまきょう）というお経の義疏（ぎしよ）を作られる。44歳に法華経を完成されまして、書物として残っております。

49歳、ちょうど最期の年になりますが、聖徳太子が2月22日にお亡くなりになるときに、斑鳩宮で新しい着物、袴を着用し着替えた妃に「われ今夕、遷化す。汝も共に死すべし。」と謂われたといい、二人揃って亡くなられたということです。

聖徳太子の葬儀が行われ、家来たちは各々香花を捧げ、僧侶たちは唄を讃じ、斑鳩宮から墓所に至るまで、道の左右、百姓(※国民のこと)、垣のごとくおおわれて、香花を捧げてお念仏を唱えられたということで、民衆の悲しみを表しているわけでございます。

聖徳太子のストーリーは大体こんなところでございます。

法隆寺の金堂の中心に釈迦三尊像という仏様がおられまして、この後背には銘文が書かれております。

それによりますと、推古29年12月聖徳太子の母、穴穂部間人皇后がこの世を去られたということです。翌年の1月22日には聖徳太子がご病気になられたと記されております。皇妃膳部妃(かしわでのきさき)は看病疲れで病に倒れられ床につく。それで周囲の家来たちや親戚が集まって心配して願いをおこして三宝に頼ろうと、仏教に頼ろうということになった。そして聖徳太子と同じ寸法のお釈迦様の像を作ったということです。釈像尺寸王身(しゃくぞうしゃくすんおうしん)と光背には書かれております。

聖徳太子と同じ寸法のお釈迦様を造ることで、皆この願力によって病を転じ、命を延ばし、この世に長く留まってほしいという願いをおこされた。そして浄土に登り、妙果を昇せられくださいと願っている。

しかし2月21日、突然膳部妃が世を去って、翌日法皇太子、この世を去ると。2月22日、聖徳太子はこの世を去られたということです。

推古31年、623年3月に願いのごとく、慎みて釈迦の尊像、侍、荘厳具を造り終わると書かれておりまして、聖徳太子がお亡くなりになられた明くる年に完成したということでございます。

聖徳太子の病気が治るようにと造られ始めたのですが、最後は聖徳太子の追悼、供養のために釈迦三尊像が作られたと書かれております。聖徳太子のために造られた釈迦三尊像、まさにこれが聖徳太子信仰の芽生えということで、聖徳太子がお亡くなりになったあと太子信仰がこの頃からうかがえるのではないかとということです。

そして平安時代の中ごろに聖徳太子の信仰が非常に盛んに

		<p>なってきます。藤原兼輔によって『聖徳太子伝暦』、先ほどお話ししました聖徳太子の伝説が作られます。</p> <p>その伝説にともなって、聖徳太子の絵伝、襖絵が書かれるようになり、また聖徳太子の像が作られます。そして鎌倉時代になり、聖徳太子信仰が絶頂期に達します。聖徳太子が苦しみから救ってくださる観音の化身と信仰されるようになり、親鸞上人は倭国の教主、聖徳王と言われ聖徳太子を日本のお釈迦様だと褒め称えておられまして、宗派を超えて、聖徳太子との関連を大事にされています。聖徳太子像をお祀りしているのは浄土真宗にもございますし、天台宗、真言宗など、各宗派で聖徳太子像が日本全国でお祀りされています。</p> <p>お寺以外にも一般の方々、講というものがありまして、大工さんが集まって太子講を作る。聖徳太子が飛鳥時代に技術とか芸術とかを取り入れた開祖ということもあり、お寺とは関係なく、そういったグループで今も聖徳太子をお祀りし、太子講が盛んに行われている。聖徳太子の信仰は色んな形で今も残っております。</p> <p>本日はお時間でございますけれども、聖徳太子のことを少しでも知っていただきたく、聖徳太子の伝説を基にお話させていただきました。</p> <p>ご清聴どうもありがとうございます。</p>
14:00	池上	<p>古谷執事長、ありがとうございました。</p> <p>それでは只今より休憩時間とさせていただきます。</p> <p>第2部は14時20分から始めさせていただきますので、よろしく願いいたします。</p> <p>また、本日、受付ロビーにおきまして、聖徳太子の年表を掲示させていただいております。また、地元斑鳩町の特産品である斑鳩ブランド品に認定された商品を1階のライブラリーショップで販売しておりますので、ぜひこの機会にお手にとってご覧くださいませ。</p> <p>それでは14時20分から第2部を開催させていただきますので、よろしく願いいたします。</p> <p style="text-align: center;">《 休 憩 》</p>
14:20	池上	<p>それでは只今より、第2部特別トーク鼎談を始めさせていただきます。「斑鳩の里で、日本文化の源流に出会う旅の勧め」と題しまして、(株)小学館 サライ編集長 三浦一夫様、斑鳩町 教育長 山本雅章様、そして私斑鳩町観光キャンペーン大使 池上で進めさせていただきます。</p>

	<p>三浦</p>	<p>それではお二方よろしく願いいたします。</p> <p>こんにちは。小学館でサライという雑誌の編集長をしております三浦と申します。今日はお呼びいただきありがとうございます。高いところから失礼いたします。</p> <p>私の役目はですね、本日第一部で素晴らしい聖徳太子のお話を伺って、じゃあ斑鳩ってどんな所だろう、斑鳩の魅力を私が皆さまに代わって山本先生や池上さんにお尋ねするようなかたちで進めてまいりたいと思います。</p> <p>皆さまのお手元に両面のカラーコピーがございますか。こちらは先月サライで奈良の特集をした際の記事のコピーですが、皆さまご存知かとは思いますが、このときは宮大工の小川三夫さん、法隆寺の解体修理で知られる西岡常一さんのお弟子さんでいらっしゃるんですが、この小川さんと法隆寺を散歩するという内容で取材してまいりました。</p> <p>この小川さんに法隆寺や斑鳩を散策するにはいつがよろしいでしょうかと伺ったときに、やっぱりそれは朝なんじゃないでしょうか、ということでした。法隆寺、斑鳩を朝散歩するためには斑鳩に泊まらないと散歩はできません。私どものサライも創刊30周年で今までに何度も奈良は取材してまいりましたが、斑鳩には魅力ある宿泊施設はなかなかできなかった。</p> <p>それが今年一つ、大きな宿泊施設ができましたのでその辺のお話を伺いたいんですが、その前に法隆寺のお話として、このときは仏像の特集をしたんですが、法隆寺の仏像についてまず教育長の山本さんにお話をさせていただきたいと思いますので、よろしく願いします。</p>
	<p>山本</p>	<p>山本でございます。どうぞよろしく願い致します。</p> <p>法隆寺の仏像ですけれども、サライの11月号を見ていただいた方がわかりやすいと思いますが、法隆寺の3つの仏像を見ていただきたいです。私の大好きな仏像なんですけれども、実はサライの編集長が編集された記事にそのまま3つ載っているんです。</p> <p>その方が詳しいかもわかりませんが、法隆寺は1400年の歴史の中で、日本で初めて仏教文化が華開いた寺院であると認識しております。また世界最古の木造建築であり、飛鳥時代の貴重な伽藍や仏像をはじめとした寺宝と申しましうか、お寺の宝物、世界が誇る至宝の宝庫であると思っております。</p> <p>その中で先ほども古谷執事長が申された、聖徳太子が亡くなられた後、623年にお妃と皇子が建てたという供養の仏</p>

		<p>像、釈迦三尊像をまずは見ていただきたい。</p> <p>もう一つは夢殿の本殿にあります救世観音像、それともう一体、あまり知られてはないんですけども古今一陽集というのがございます。その中に悪い夢を見たときに手を合わせると良い夢に替えてくれるという観音立像がございます。これが夢違（ゆめたがい）観音、“ゆめちがい”観音ともいうんですけども、この観音立像はそれまでの観音様と明らかに形が違います。いわゆる中国、朝鮮から伝来してきた仏像と、日本の新しく生まれつつある文化が融合しております。そういったところの文化で、アルカイクスマイルという両サイドの口角が少し上がり、微笑みかけている。写実的というかりアルというか、ふくよか。そして体の方が細身で少しウエストが窪んでおります。そういう観音像がございます。この3体はぜひ見ていただきたい。ご満足いただけると思います。</p>
三浦		<p>ありがとうございます。ぜひ皆さまにも現地で見ていただきたいと思います。先ほどちょっと申し上げましたが、今年魅力的な宿泊施設ができて、私どもも取材させていただいたんですが、法隆寺門前にできた門前宿 和空法隆寺についてお話を伺えますでしょうか。</p>
山本		<p>この和空法隆寺は法隆寺の南大門の目の前にございます。国宝を臨む門前宿 和空法隆寺といいます。</p> <p>この宿は何が違うかと言いますと、まず昔の寺院というのは参拝者が体を清めたり、けがや病気を癒すための浴室があったようです。参拝者が静養をするという歴史的な流れの中で、この和空は男女別に4つの浴室、浴堂があります。</p> <p>飛鳥のキトラ古墳の中に東西南北の壁画があり、その壁画に四神、四つの守り神というのがございます。玄武、白虎、青龍、朱雀、この四神から来ている浴堂というのが和空法隆寺にございます。この浴堂で、香湯であったり薬湯で体を癒していただけるようになっています。</p> <p>二つめの特徴は、外国人の方にはすごく喜んでいただけるのではと思うんですが、文化的な体験ができる。茶道であったり華道であったりが体験できます。</p> <p>三つめの特徴は、夜に法隆寺に関する学習会・研修会ができる。その研修会をした翌日は実際に法隆寺を無料で案内していただけます。差別性と言うんでしょうか。他の旅館、ホテルでは味わうことができないおもてなしがこの和空にはございます。ぜひ斑鳩町の和空へお泊まりください。</p>

三浦		<p>ありがとうございます。そして同じ参道にですね、いまこれから建設中なんですけど、もう一つ新しい宿泊施設ができますので、こちらは池上さんの方からご説明いただけますか。</p>
池上		<p>先ほどの和空はたくさんの体験ができるという大変大きなメリットがございます。それに対しまして現在建設中の（仮称）法隆寺パークホテルは素泊まりでお泊まりいただけたところも良いと思っております。たくさんの経験をさせていただくにはそれなりに時間がかかってきますけれども、さっと泊まって次の目的地に行きたいなど、そういった方にはこちらのパークホテルが良いのではと思っております。</p> <p>来年の12月オープン予定でして、こちら60室ほどお部屋をご用意できるかなというところなんです。先ほどの和空も60室ほどございますので、たくさんの方にお泊まりいただけます。</p>
三浦		<p>ありがとうございます。このように、新しい魅力的な施設ができてまいりましたので、ぜひ皆さまにも訪ねていただきたいです。</p> <p>もう一つ、法隆寺とともに魅力的なところがちょうどこのコピーの1枚目の右下にあります。藤ノ木古墳という場所があるんですけど、この古墳は大変珍しい、というよりも私がびっくりしたのは見学ができるんですね。中が見学できる古墳はなかなかありませんが、それについて山本先生お話していただけますか。</p>
山本		<p>魅力の中にはミステリアスな部分もございます。</p> <p>まず一つは直径50mの大型円墳なんです。これは6世紀後半につくられたと言われております。昭和60年に1回、昭和63年に2回、計3回石室内の発掘調査を行っております。</p> <p>昭和60年の発掘の際に、朱塗り、ちょっと赤っぽい朱塗りの大型の家型石棺が発掘されております。その時に土器も発掘されているんですけども、もう一つ世界的に脚光を浴びたのは何かといいますと、装飾性豊かな金銅製の馬具が発見されております。これが未盗掘だったのです。つまり盗まれてない、人の手が入っていない。ですから当時の美しさがそのままに残っていたということで、一躍藤ノ木古墳が有名になりました。我が国の歴史をひも解いても、本当に有名な古墳であります。</p> <p>この副葬品を見たときにどれほど素晴らしいか専門家の方に見てもらったところ、これは大王（おおみかど）、皇子ク</p>

ラスの副葬品であろうと。もしくは大豪族ですね。物部氏、蘇我氏でしか考えられないようなものです。

ではいったい誰が埋葬されたのかということですが、実は2体の成人であったと。どちらも男性。親子であるとか男女であるならばよくわかるんですけども、大人の成人男性が2体入っていることが考えられないことなんです。今もそうなんですけど、大昔も同じくなかなか考えられない。考えられるとすれば、これは特殊な状況なのではないかと言われていいます。

じゃあ誰の遺体なのかということですが、その前に江戸時代後期まであったといわれる、宝稜寺といわれる建物がございました。つまり墓が守られていたわけですね。墓守があったからこそ未盗掘と言われているんですが、この頃では天皇陵ですら守られていない例があったと言われていいます。

被葬者として大有力視されているのが、今日も執事長のお話に少し出てきましたけれども、欽明天皇の皇子で、敏達天皇の弟である穴穂部皇子（あなほべのみこ）であろうと。そしてその弟と言われている宅部皇子（やかべのみこ）です。

じゃあその皇子がどうして貶められたのかということですが。敏達天皇が崩御したあと、穴穂部皇子が死んだ王（敏達天皇）には仕えて、生きた王（穴穂部皇子）には仕えられないのかと発言するなど、権力欲をあらわにするようになります。そして敏達天皇の皇后、のちの女性初の天皇の推古天皇を無理やり我がものにしようとしみます。それは達成できず、その後、用明天皇が天皇の座につきます。これは聖徳太子の父帝です。その頃からこの穴穂部皇子は物部守屋（もののべのもりや）と結託するようになります。

物部守屋と穴穂部皇子が結託するようになって、穴穂部皇子は勢力を拡大しようとしたのでしょう。しかしながら、物部守屋には宿敵がいます。それが蘇我馬子です。蘇我馬子はそれを阻止するために穴穂部皇子を暗殺してしまいます。そのときに一緒に行動していた宅部皇子も暗殺してしまいます。その後は物部守屋も、蘇我氏によって聖徳太子と一緒に殺されてしまいます。そうして物部氏が蘇我氏に亡ぼされるまでのほんの1年の間に藤ノ木古墳に埋葬されたのが、穴穂部皇子と宅部皇子であると、そのように言われています。

しかしながら、その2体を入れるのであれば、なぜ素晴らしい装飾品を副葬したのかと謎も残るんですが、崇りを恐れて鎮魂の意味で立派な装飾品を入れるという形をとったのではないかなと思っています。話が長くなりました。

三浦

という大変興味深い古墳なんですけど、年に2回特別公開さ

		<p>れるということなのですが、ただふるさと納税をしますと、もっと見られるという。ちょっとご説明お願いします。</p> <p>池上 そうなんです。やはり古墳の中を見られるということがなかなか珍しいことだと先ほどのお話でもありましたが、ふるさと納税をしていただくと、古墳の中を解説付きで見学していただくことができます。藤ノ木古墳は管理を斑鳩町がしっかりしておりますので、身近な古墳として楽しんでいただけるのではないかなと思います。私も斑鳩町で生まれ、斑鳩町で育てっておりますので、もちろんこの藤ノ木古墳の中を拝見させていただいたことがあります。とても興味深いものですので、一度見ていただきたいです。</p> <p>三浦 ありがとうございます。ぜひ皆さんご検討ください。 また、斑鳩は和歌に多く詠まれている場所でもあるんですが、皆さま大変よくご存知かとは思いますが、大変有名な歌もがございますので、和歌について山本先生にお話いただければと思います。</p> <p>山本 今写真の方に出ているのが竜田川です。在原業平の、映画にも出てまいります皆さんよくご存知の「千早ぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは」という歌です。 もう一つはこれは桜のシーズンの三室山なんですけれども、この三室山は「嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり」と詠われています。これは能因法師が詠んだ歌なんですけれども、とても有名です。 そしてもう一つ皆さまに知っていただきたいのが、聖徳太子の和歌も万葉集にあるということです。実は私の家内が高校の国語の教師をしているんですが、「知らんでそんなん」と言われました。家内に「知らんで」と言われたので個人的に調べたんですが、ありました。 万葉集には愛を詠った相聞歌と、死を詠うと言ったら失礼なんですけど、人の死を悲しみ哀悼するという挽歌がございます。これは挽歌です。竜田山を聖徳太子が歩まれた、その竜田山で伏し倒れていた旅人を見て哀れに思ったときの歌なんですけれども、「家にあらば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥せる この旅人あはれ」。妹というのは妻のことで、家にいたならば妻の手枕でゆっくり休むことができたであろうに、旅先で草を枕に伏し倒れているこの旅人は哀れである、という情景を詠った歌です。ですから、皇族であり、政治家であり、歌人であった聖徳太子ということです。</p>
--	--	---

三浦		<p>ありがとうございました。</p> <p>先ほどちょっとちらっと見えてしまったと思うんですが、この和歌にちなんだ斑鳩の新しい名物料理というのがございます。それについてご説明いただけますでしょうか。</p>
池上		<p>私がお説明します。</p> <p>ぱっと見て皆さまこれを何だと思われませんか？唐揚げだと思われませんか。日本人が大好きな唐揚げですが、こちらは竜田揚げというものです。調理の仕方がから揚げと竜田揚げで少し違います。</p> <p>なぜ斑鳩で竜田揚げなのか、その由来は、竜田川を流れている紅葉は真っ赤なものなのですが、竜田揚げは醤油に漬込んで揚げているためから揚げと比べて少し赤く、竜田川を流れる紅葉のようだというところからきています。</p> <p>その竜田揚げを写真にもあるとおりお皿に紅葉と飾るなどして、斑鳩では竜田揚げを名物にしていこうというところなんです。</p> <p>斑鳩町内に竜田揚げを召し上がっていただけるお店がいくつもあるんですが、そのお店ごとに少し味付けが違っておきますので、食べ歩きができるのではないかなと思います。</p> <p>斑鳩町は歩いて回っていただくのが一番楽しんでもらえると思っておりまして、そういった食べ歩きグルメも折りませると斑鳩町全体を楽しんでいただけたらと思います。竜田揚げの店舗は大体20店舗程あるのですが、色々な味を制覇していただきたいなと思っております。</p>
三浦		<p>ありがとうございます。</p> <p>先生、竜田揚げのお店には基準があると伺いましたが。</p>
山本		<p>そうなんです。二つの基準があります。</p> <p>店で提供するときは、商品名は必ず「斑鳩名物 竜田揚げ」と名付けてほしい。もう一つは、竜田揚げを提供するときに由来を説明する。この二つが約束となっております。</p>
三浦		<p>ぜひ行ってみたいと思います。</p> <p>そのほかにも魅力的な飲食店、お料理があると聞いております。</p>
池上		<p>そうですね。今かなりの数の飲食店ができてきています。駅から歩いて10秒ほどのところにとってもおいしいお料理屋さんがあります。若竹であったり、法隆寺駅を降りてすぐに</p>

		<p>商店街があるんですが、その商店街に和ダイニング法隆寺というお店があったりと、駅から歩いてすぐのところに、ご飯を食べていただけるお店がございます。</p> <p>特に私の好きなのが先ほど申しあげました若竹なのですが、私でキャンペーン大使が3代目なんです、歴代のキャンペーンレディの方たちもそちらに足繁く通っていたようでして、手のひらよりもっと大きいエビフライですとか、もちろん竜田揚げも召し上がっていただけるお店です。</p>
三浦		<p>ありがとうございます。ぜひ伺ってみたいなあと思います。</p> <p>ではまたちょっとお話を交えて、斑鳩という町、土地の由来についてお伺いしたいんですが、私も初めて知ったんですがイカルという鳥が由来じゃないかと聞いているんですが、イカルという鳥についてご説明いただけますでしょうか。</p>
池上		<p>はい。イカルという鳥なんですけれども、今皆さんに見ていただいている鳥でございます。</p> <p>くちばしが黄色くて、手のひらより少し大きめ。先ほどのエビフライとは少し違いますけれども。そのような大きさの鳥でございます。この鳥の鳴き声が「イカルコキー」とカタカナで鳴いているように聞こえるといいます。この「イカルコキー」が「イカルコキー、イカルコキー、イカルガ」になったという説もあります。この鳴き声、皆さん気になられると思います。イカルコキーと聞こえる鳥なんているものかと。実際に聞いていただきたいと思います。</p> <p>《イカルの鳴き声》</p> <p>このような鳴き声が聞こえます。聖徳太子もこの鳥の鳴き声を聞きながら、斑鳩に法隆寺を建てたのではないかと考えると、この鳥にさえも歴史を感じるなど私は思います。</p>
三浦		<p>なかなか聞けないんじゃないんですかね。この鳴き声は聞こえるんですか？</p>
山本		<p>ちょうど今の時期（11月上旬）から4月頃まで聞けるとは言われております。野鳥の会の方々のお話を聞きますと、3月が一番良いと聞きます。3月の早朝か夕暮れに見る機会、聞く機会がぐっと増えますよということでした。ただ私は見たことがありませんので、偉そうに言ったらダメなんですけれども。この竜田公園、先ほども紅葉や桜であった竜田公園の竜田川沿いで、バードウォッチングされる方がたくさんお</p>

		<p>られると聞きます。</p>
三浦		<p>そうですか。ぜひ聞いてみたいなあと思います。</p> <p>今日はですね、聖徳太子のお話を伺いましたので、教育長さんもいらっしゃることで、聖徳太子と斑鳩の教育についてお話を伺ってみたいと思います。斑鳩には聖徳太子のかるたがあるとお伺いしたんですが。</p>
山本		<p>斑鳩町は「小中連携事業」を行っており、その中に交流部、斑鳩部、英語部があり、平成27年・28年・29年の三年をかけまして「いかるがかるた」を作りました。初年度は文字札を作り、2年目は子どもたちが好きな文字札を取って、そこに合う絵を募集しました。最終の29年度に完成し、その後機会があるごとに「かるた大会」をしたり、小学校で外国語が教科になり英語の専科教師もおりますので、交流部の教師と子どもたちと一緒に英語版の「いかるがかるた」を作り、法隆寺を訪れる外国人の観光客を対象に「かるた大会」をしたいなど。子どもたちの子どもたちによる子どもたちのための「かるた大会」ができればと思っています。この「かるた」は本当に素朴な、子どもたちが作ったもので販売はしていないんですけれども、こういった「かるた」も作っております。</p>
三浦		<p>先ほどもそのお話を伺って、また興味深かったのが「和」という教育ですね。和という字と教育について、またお話を伺ってみたいと思います。</p>
山本		<p>先ほどこちらでご挨拶させていただいた中西町長から、和の精神を広めなさいという使命を我々受けております。言われたから仕方なくやっているのではなくて、幼稚園・小学校・中学校の子どもたちの発達段階に応じて、いじめをしない、トラブルの被害者にも加害者にもならない、すべて和をもって貴しと為すという教育を小さい時からやっといこうと。園にも学校にも園目標、学校の教育目標がございます。そこには、和の精神の言葉が入っています。</p> <p>そして、教員がクラス担任をもって、初めてクラスに入るとき、私は一年間このような教育をします、このような取り組みをします、という所信表明をしてもらいます。もしくは第1回目の道徳の時間に、和をもって貴しと為すという授業の展開を考えています。</p> <p>ただ、小学校1年生・2年生・3年生くらいの子に、和をもって貴しと為すということはわからないので、和という言葉</p>

		<p>葉について、先生の言葉で話してもらいます。子どもたちの耳から心に自然と伝わっていく教育展開をお願いしています。来年4月から徹底してやっていきたいなと思っております。</p>
池上		<p>徹底してやっていかれるということなのですが、私も斑鳩生まれ斑鳩育ちですので、気づいたら私も心の中に和をもって貴しと為すというのが入っております。やはり斑鳩町に住んでいると、私の小学校は法隆寺まで歩いて5分くらいですので、自然とその精神が入ってくる町だなと感じています。そして、こういう人間ができあがります。</p>
三浦		<p>子ども心に、何か聖徳太子についてエピソードがあれば。</p>
池上		<p>なかなか信じがたい話ではあるかもしれませんが、私は小さい頃から聖徳太子は斑鳩町を守ってくれる方だと教わってきています。もちろん斑鳩町だけでなく、日本全体を守っていただけるような大きな方だとは思いますが、斑鳩町は災害の少ない町だと感じます。今年は台風の影響がたくさんあったりだとか地震があったりだとか、悲しい出来事が多くありましたが、斑鳩町はそういった影響が少し少なかったように感じます。それは聖徳太子が斑鳩町を守ってくださるからだよと、親から教わってきました。</p> <p>あとは法隆寺の南大門には、お魚の鯛の形をした鯛石というのが埋め込まれていまして、その鯛石は絶対に濡れない石といわれています。雨が降ればもちろん濡れるんですけども、ここでいう濡れないは、津波や川の氾濫が起こったりしたときにはそこまで水がつかないという、そういう言い伝えがある石です。ですから法隆寺、ひいては斑鳩は聖徳太子がずっと守ってくれているのではないかと、私は聞いたことがあります。</p>
三浦		<p>なるほど、それはすごいですね。</p> <p>そして、2021年、聖徳太子が亡くなって1400年という節目になるということなのですが、改めて山本先生の方から2021年の1400年御遠忌についてお伺いできればと思うのですが。</p>
山本		<p>私は元々、斑鳩町の出身ではございません。元々は吉野、南朝の真ただ中のところまで育った人間です。斑鳩町は当然伝統文化の深いところだと承知の上で来させていただきましたが、すごくあたたかいところです。本当に良い所へ来させていただいたと感謝しています。</p>

		<p>先ほど和という話をさせていただきましたが、和というのは言葉じゃないな、関わりだな、思いやりだな、というのを切に感じております。その教えが聖徳太子から来ているということは言わずもがなです。</p> <p>新しく転勤されてきた先生に斑鳩町に来たのだから斑鳩町のことをよく理解してくださいね、と話をするんですけども、聖徳太子のことを知らない、法隆寺のことを知らないという人は一人もいません。当たり前の話なんですけれども。ですから話がすごく理解してもらいやすいと言えます。</p> <p>このように斑鳩町では日本の仏教文化の源流と言われる伝統文化であったり、仏像であったり、それから法隆寺、法起寺、中宮寺、法輪寺であったり、また紹介もさせていただきました藤ノ木古墳など、名所が本当に多数ございます。</p> <p>そしてまたご紹介にもありましたように、2021年、令和3年に1400年の御遠忌を迎えます。そのようなときにぜひ皆さんに斑鳩町にお越しただいて、1400年の悠久の時間を体感していただきたいなと思います。ゆっくり時間が流れております。そういう法隆寺をぜひ見てただいて、仏像も見てただいて、そのあとは門前宿 和空法隆寺でぜひ浴堂に浸かっていたただいて、美味しいお酒などを召し上がっていただきたいなど。そして竜田揚げと、イカルと我々ともに皆さまをおもてなししたいと思いますので、ぜひ斑鳩町へお越しください。</p> <p>ありがとうございます。私が今日初めて知るお話がいくつかありましたけれども、このように美しい風景と充実した宿泊施設、それから聖徳太子の精神・教え・考えがいきている斑鳩にぜひ皆さまお越しただきたいと思いますので、私のほうからはここでご挨拶をさせていただきます。</p> <p>どうもありがとうございました。</p> <p>《拍手》</p>
三浦		
	池上	<p>ありがとうございました。</p> <p>ではこれで鼎談の方を終了させていただきたいと思います。みなさん、斑鳩の里の魅力を感じていただけましたでしょうか。</p> <p>そろそろお時間も近づいてまいりましたので、これをもちまして、東京・斑鳩リレーセミナー「聖徳太子1400年御遠忌～法隆寺との関わり～」東京公演を終了いたします。</p>

14:55	池上	<p>お二方ありがとうございました。</p> <p>《拍手》</p> <p>出口でアンケートを回収させていただきますので、ご協力いただきますようお願いいたします。</p> <p>なお、お手元のペンは、アンケート用紙と一緒に出口で返却ください。</p> <p>本日は、ご来場いただきまして、誠にありがとうございました。</p>
-------	----	--